

養父母の慈愛

鹿児島原告団の団長・鬼塚建一郎さんは吉林省敦化県の収容所で酷寒の2月、実母テルさん死亡のあと孤児となり、周囲の大人たちの手で粟^{あわ}20^キと引き換えに鄧兆学、李振清夫妻に預けられた。

満拓(満州拓殖公社)から10町歩の土地を借り、作男3人を使っていた借地農・兆学さんは、満州国崩壊

井出 孫六

この風景

と共に一転して大地主となった。2人の娘しかいなかった彼が後継者に擬して孤児を引き取ったと考えるより、養父母とも、東に泣く子あれば……の慈悲心の持ち主だったと見た方が正しい。

やがて訪れる土地改革の嵐の中、鄧家の土地の9割が貧農に分け与えられ、兆学さんの頭上に「富農帽

子」が被^{かぶ}されようとも、少年に向けられた養父母の慈愛は些^{いささ}かも変わらなかつた。兆学さんは学歴ゼロの農民ながら、広い知識と品性と人格を備えていた。東北の阿Qたちは反面教師に事欠かなかつたのであろう。

牛の世話で農繁期、小学校に通えぬ少年に古びた中国語辞書を渡し、これを先生と思つて調べなさいと兆

学さんは言った。少年の柔らかな頭に詰め込まれた漢字が帰国後の日本語習得に役だつて、鬼塚さんはいま原告団長と通訳を兼ねている。「中国残留孤児」の訴状に、生活保護を打ち切られ、養父母の墓参もかなわなかつたという声が多いのは、尊厳を傷つけられたものの悲しみの声と受け止めるべきだ。(作家)